

初夢を占う

雪印乳業札幌支社

酪農部 大 戸 辰 夫

新年に柄にないことを考えた。

酪農経営の拡大、近代化が叫ばれ進められてから今年で何年目だろう。日本の農業が、敗戦の混乱から立ち直ってから、すでに4分の1世紀が過ぎていった。買出しまでして大騒ぎをした米が、昨今ではあり余って古々々米が出ようという厄介物扱いされる時代になった。酪農もずいぶん変わったものだ。昭和24年にはわずかに20万2,000頭の乳牛が13万5,000戸の酪農家に飼養され、「有畜農業でなければ」といわれて立てられた搾乳目標がなんと1戸当たり3頭、所得目標20〜30万円というところであった。それから20年、昭和45年には、乳牛頭数180万4,000頭、酪農家戸数30万7,000戸と発展した。そして今では搾乳頭数少なくとも20〜30頭、所得目標200万円と約10倍にエスカレートしてきた。しかも一方では貿易の自由化は好むと好まざるとに拘わらずその速度を増し、遂に昨年は外資も上陸し、農産物の自由化も新年とともに急速に進められてくるであろう。

そして事あるごとに言われることは「国際競争力を持つ」「外国の酪農に負けない経営を築け」ということだ。

第1表 バター輸入価格(kg当)

国名	輸入価格 円
デンマーク	253.9
オランダ	260.0
ベルギー	249.0
オーストラリア	217.5
ニュージーランド	219.2

註 昭和44年1〜12月輸入実績による。
乳業時報 273号

ハテそれではどうすりゃいいんだ。一つ考えてみようではないか。まずは日本に入ってくるバターの輸入価格(日本の港に到着した時の価格)は第1表の通りで、わが国の安定

第2表 主要国のバター国内価格(kg当)

国名	摘要	価格 円
デンマーク	国内工場売渡し	515.1
オランダ	〃	603.4
ベルギー	国内市場	641.1
オーストラリア	国内倉庫渡卸売	436.3
ニュージーランド	国内卸売	239.1

註 昭和45年4月現在kg換算価格。
乳業時報 277号

指標価格1kg当たり640円前後と比較すれば約半分の価格である。これは第2表の輸出国の国内価格と比較ればわかる通りダンピング価格である。乳製品輸出国、とくに欧州諸国ではバターの在庫が多く、これを外国に売らなければその国の農業そのものが成り立たないからである。いま仮りに、その国内価格平均約600円として、これに運賃、荷扱料等の諸掛、保険料金利等を加え、さらに35%の関税を加算すればどうなるだろう。

少なくとも800円は超えてしまう。これならば現在の国産品の価格でも、十分に対抗出来るであろう。しかし現実には厳しく安いダンピング価格で入ってくるのである。なにがなんでもこれに打ちかっっていかなければならない。

さてそれでは主要酪農国の乳価はどうであろうか。第3表はEEC諸国の指標価格である。基準脂肪率で3.7%で大体35円程度である。何もここで日本の乳価が高いと言おうとしているのではない。もし日本でこの乳価でやるとしたらどうすればよいかと考ただけである。ここからが夢である。今までは、エサはkg当たりいくら、建物、機械の償却費はいくらというように原価計算をして、だから乳価はいくらでなければならぬとやって

昭和46年1月号 目次

- 表紙写真 (十勝上土幌大規模草地)
- ごあいさつ (風景は北海道八雲町)
- 豚の病気のいろいろ V
- 初夢を占う
- 国際草地会議に出席して (I)
- 昭和45年度日本草地学会秋季大会開催さる
- 乳牛日本一をきそう
- キュウリのホルモン処理による雌・雄花の調節 (1)
- 生物農薬クワコナコバチ
- 裏表紙写真 (上: 高知市岡崎牧場, 下: 藤の沢牧場)

-表 1
- 五十嵐 清.....表 2
-表 3
- 大 戸 辰 夫..... 1
- 真 木 芳 助..... 3
- 中 野 富 雄..... 7
- 藪 内 悟.....10
- 早 瀬 広 司.....11
- 綿 島 朝 次.....14
-表 4

きた。

物価高の昨今のことだ。たまにはヘソ曲りに逆に考えてみようではないか。つまり35円の乳価だとすればエサはいくらでなければならぬか、機械設備への投資はいくら以内でやらなければ目指す所得は生まれぬかとか考えてみようということだ。

そこで今仮りに200万円の所得を得なければならぬと

**第4表 生産費の
費目割合**

費目	割合
購入飼料費	24.1%
自給飼料費	45.1%
飼育労働費	10.3%
諸材料費	0.7%
賃料料金	6.9%
建物償却費	1.4%
農具償却費	1.3%
乳牛償却費	9.9%
その他	0.3%

註 昭和44年牛乳生産費調査結果。北海道階層別30頭以上。

第5表 300万円の内訳

費目	金額
購入飼料費	72.3万円
自給飼料費	135.3
飼育労働費	30.9
建物償却費	4.2
農具償却費	3.9
乳牛償却費	29.7
その他	23.7
合計	300.0

**第6表 生産費を300万円で上げるための
投資額と飼料費**

費目	条件	金額
購入飼料価	成牛飼料のみとし乳量の20% (28.6t) を給与すればkg当	25
自給飼料価	成牛換算45頭、1頭当30tを給与すればt当	1,000
建物投資額	償却年限60年残存価格10%とすれば	2,800,000
農機具投資額	償却年限8年残存価格10%とすれば	347,000
乳牛導入価	成牛33頭、償却年限6年残存価格20%とすれば1頭当	67,500

第3表 EEC各国指標価格

国名	100kg当たり 価格
ベルギー	3,500
西独	3,836
フランス	3,120
オランダ	3,511
イタリア	3,534
日本	4,749

註 乳脂率3.7%農場渡、日本円換算。北海道酪農協会調べ

しよう。所得率を40%とすれば、粗収入500万円は少なくとも上げなければならぬ。1頭当たり4,500kg搾乳とすれば35円の乳価では約15万円の粗収入である。

この際計算が面倒になるから産債収入や間接経費は考えないことにする。500万円の粗収入を確保するには、33頭の搾乳牛が必要になる。勿論1頭当たり搾乳量が多ければ頭数は少なくすむのは当然である。この粗収入を上げるための生産費は300万円である。

昭和44年度の農林省における牛乳生産費調査結果の費目割合を北海道の30頭以上の階層でみると第4表の通りである。購入自給を合わせて飼料費で69.1%を占めている。その次が労働費の10.3%、乳牛償却費

の9.9%と続き、この3費目でなんと89.3%となり、生産費の大半を占めているわけである。

この費目割合が適正であるかどうかは別として、いまこの割合を借用して、年間33頭から搾乳される約143tの牛乳の生産経費300万円の内訳を逆算してみると第5表のようになる。

1年間の直接生産経費の内訳である。これを費目毎に一定の条件によって投資額や購入単価を算出してみよう。

さて乳価kg当たり35円で所得率40%を上げるためには、即ち生産費kg当たり21円で牛乳生産するにはどうすればよいか。

まず280万円で成牛換算40~45頭収容の牛舎その他附属建物を建設する。そして、そこに1頭6万7,500円の搾乳牛33頭を導入し、kg当たり25円の濃厚飼料を年間28.6t購入して飼養すればよい。

一方農機具は、飼料作物での負担分を含めて30~50万円程度を投資して大型機械を購入し、自給飼料をkg当たり1円程度で生産して給与すれば、大雑把な計算だが十分に成り立つのである。

さあ早速取りかかるとするか。

しかしだ。夢はさめて現実を眺むれば、なんと厳しいことか、みなさんご存じの通りである。「そんなこと出来るか」なんて言いなさんな。新年早々グチをこぼすのはやめよう。70年代はいろいろの意味で日本の一大転機だと言われている。酪農にとっても、いよいよ国際的に自由競争の時代に入ろうとしている。

「窮すれば通ずる」と言うのではない。間違っても「貧すればドンする」にならないように心掛けよう。

日本の牛乳乳製品の消費量は、酪農先進国に比較しても、まだ3/4から5/6くらいであり、品目によっては3/4にも満たぬ程度だと言われている。しかもその食生活の形態は改善されつつあるとはいいながら、澱粉食品を主とした後進国並みだという。つまり日本は、まだ牛乳乳製品の消費を5倍にも10倍にも伸ばし得る余地を十分に持った国なのだ。楽しみではないか。

あり余る在庫をかかえて、消費の伸びも期待出来ずフーフー言っている欧米先進国とはわけが違うのだ。

その上政府も米がダメとなって、やっと重い腰を上げかけたようだ。日本の農業も畜産に力を入れるといい、その中でも酪農は有望だと言われる。

経済には谷もあり山もある。谷があるからこそ山は高いのだ。一時的な谷間(停滞)にクヨクヨするような酪農家であってはならない。

明るい希望に燃えて、新しい年を生き抜こうではないか。そしてこの70年代を日本の酪農家のものにしてしよう。